

2020年『春日権現験記』現代語訳

いちわ

興福寺の壹和僧都は、修学相兼ねて、才智たぐひ

興福寺の壹和僧都は、

のが 修行も学問ともに励み、
とやま

才能・知恵が優れて並ぶ者が

なかりき。後には世を遁れて、外山といふ山里に
いなかった。
後には俗世から離れて、
外山という山里に

ゆいま かうじ

住みわたりけり。そのかみ、維摩の講師を望み申し
住み続けた。
その昔、
維摩会の講師になることを 望み申し上げた

けるに、思ひの外に祥延といふ人に越されにけり。
のに、 予想外にも 祥延という人に
先越されてしまった。

なにごとくも前世の宿業にこそ、とは^ア思ひのどむれ
「全てのことは 前世で行ったことの報いであるのだらう」。と思つては 心を穏やかにしようとする

ども、その恨みしのびがたくおぼえければ、ながく
けれども、その恨みは 耐え忍ぶのが難しく
思われたので、
「長らく
とそう

本寺論談の交はりを辞して、斗敷修行の身とならん
本寺の 論談交流を やめて、
仏道修行のために諸国を歩く身にならう」

と思ひて、弟子どもにもかくとも知らせず、本尊・
と思つて、 弟子たちにも
弟子たちにもこのような事情だとも知らせず、持仏と

おひ

持経ばかり竹の笈に入れて、ひそかに三面の僧坊を
お経だけを 竹製の背負う旅行箱に入れて、
こっそりと 僧侶達の住居を

いでて四所の霊社にまうでて、泣く泣く今は限りの
出て、 春日大社の社殿に お参りして、
泣きながら 最後の

法施を奉りけん心の中、ただ思ひやるべし。さすがに
法施を差し上げなされたような 心の内、
とにかく推し量るのがよい。 そうはいってもやはり

住みこし寺も離れまうく、馴れぬる友も捨てがた
住んできた寺も 離れがたく、
慣れ親しんだ友も 捨てがたい

けれども、思ひたちぬることなれば、行く先いづく
けれども、 決心したことなので、
行き先をどこと

とだに定めず、なにとなくあづまのかたに赴くほど
でさえ決めず、
を はり なる み が た
東国の方に
赴いているうちに、

に、尾張の鳴海潟に着きぬ。

尾張の

鳴海潟に

着いた。

しほひ

潮干のひまをうかがひて、熱田の社に参りて、

潮干きの合間を

狙つて、

熱田神宮に

参詣して、

かななぎ

しばしば法施をたむくるほどに、いけしかる巫女

何度も

法施を

お供えしているうちに、

異様な巫女が

来て、壹和をさして言ふやう、

来て、

壹和を

指さして

言うことには、

なんぢ

「汝、恨みを含むことありて本寺を離れてまどへり。

「おまえは、恨みを

心に抱えることが あつて、

本寺を

離れて

途方に暮れている。

人の習ひ、恨みには堪へぬものなれば、ことわり

人の習性として、

恨みの感情には

耐えられないものなので、

(あなたの行動も)もつともでは

なれども、心になはぬはこの世の友なり。

あるけれども、

思い通りにならないのは

この世の常である。

むっ

陸奥国えびすが城へと思ふとも、エそれもまたつらき

(おまえが)『陸奥国の蝦夷の城に行こう』と思つても、

そこでも

また

恨みたくなる

人あらば、さていつちか赴かん。いそぎ本寺に帰り

人がいたら、

さて、どこに向かうのか。

急いで

本寺に

帰つて、

て、日ごろの望みを遂ぐべし」と仰せらるれば、

平素からの

望みを

遂げなさい」

と仰ると、

かうべ

壹和頭を垂れて、「思ひもよらぬ仰せかな。かかる

壹和は

頭を下げて、

「意外な

ご命令だなあ。

このような

こつじき

乞食修行者になにの恨みか侍るべき。オあるべくも

乞食修行者に

何の恨みがあるはずもありましょうか。

あるはずも

なきことなり、いかにかくは」と申すとき、

ないことだ。

どうしてこのように(仰るのですか)「と申し上げるとき、

巫女大いにあざけりて、

巫女は 激しく 嘲笑して、

カ
つつめども隠れぬものは夏虫の
包み隠そうとしても、隠れないのは
螢の光のように

身より余れる思ひなりけり

身体から溢れる

うたうら

(恨みの)思いだなあ。

といふ歌占をいだして、「汝、心幼くも我を疑ひ思ふ
という歌によるお告げを述べて

「おまえは、思慮が浅いことに私を疑っているのか。」

かは。いざさらば言ひて聞かせん。汝、維摩の講匠を

では それならば、言つて聞かせよう。

おまえは 維摩会の講師(の地位)を

祥延に越えられて恨みをなすにあらずや。

祥延に

先越されて、

恨みの心を生じたのではないか。

こんさつ

かの講匠と言ふはよな、帝釈宮の金札に記する

あの講師(の地位)というのはな、

帝釈宮の

金の札に

記されている

なり。そのついで、すなはち祥延・壹和・喜操・觀理と
のである。その順番は、

つまり、

祥延・

壹和・

喜操・

觀理と(書いて)

あるなり。帝釈の札に記するも、これ昔のしるべなる
あるのである。

帝釈宮の札に

記してある順序も、

これは前世(の報い)による導きであるに

べし。我がしわざにあらず。とくとく愁へを休めて
ちがない。(順番を決めたのは)私のやったことではない。早く早く、

憂いの気持ちを安らかにして、

本寺に帰るべきなり。和光同塵は結縁の始め、

本寺に

帰るべきだ。

和光同塵は

仏道に縁を結ぶ始まりであり、

八相成道は利物の終りなれば、神といひ仏といふ
八相成道は

衆生に恵みを与える最後なので、

神といったり

仏といったり、

その名は変はれども、同じく衆生を哀れぶこと、
その名は

変わっても、

同じく

衆生を

憐れむことは、

悲母の愛子のごとし。汝は情けなくも我を捨て
慈悲深い母親が子供を愛するようなものだ。おまえは 薄情なことに、

私を見捨て(ようと)した

いへども、我は汝を捨てずして、かくしも慕ひ示すが、
それでも私はおまえを見捨てず、
このように後を追ひ、教えるのである。

なり。春日山の老骨、既に疲れぬ」とて、

春日山の老体は、

もう疲れてしまった。」と言って、（巫女に憑依していた春日明神は

上がらせ給ひにければ、壹和、かたじけなさ、
天に）上がリなされたので、
壹和は
有り難さ、

かつごう

たふとさ、ひとかたならず、渴仰の涙を抑へて
尊さが
並一通りではなく、
（春日明神を）深く信仰する感激の涙を抑えて、

いそぎ帰り上りぬ。その後、次の年の講師を遂げて、
急いで
（興福寺に）帰った。
その後、
次の年の維摩会の講師（になるといふ念願）を遂げて、

四人の次第、キ
あたかも神託に違はざりけりとなん。
四人の順番は、
ちようど
信託と
違わなかったとのことだ。